

時の人

鐵道次官 久保田敬一氏

今度鐵道次官になつた久保田敬一氏は、土木技術家として三人目の次官である。第一が岡野昇博士、第二が勅選議員となつた八田嘉明氏。孰れも我國工事技術界にとつての功勞者であるが、久保田氏は建設局工事課長から地方鐵道局長に出で次いで、運輸局長となり、此度次官になつたのだから、工事界には暫らく遠ざかつてゐたかの觀がある。

○

久保田氏は明治三十八年七月、東大工學部を卒へると直ちに自費で渡來した。之には多分廣井勇博士の紹介もあつたのだらうが、在來中は、橋梁のプラクテースに就て餘程努力された様だ。

明治四十一年一月歸朝して十一月鐵道省に入り、暫らく官房研究所の人となつてゐたが、氏の性格は潑刺として實地工事に當るべく適してゐたらしい。工事擔當者としての氏が最も華かに活動したのは、何と云つても上越線の建設工事であらう。氏が東京建設事務所長時代には、本省に工事課長として太田圓三氏があつた。太田氏は今は故人となつたが人も知る如く、我國工事史上特筆さるべき人物である、進取的な大膽な計畫をたてる太田氏のことだから、久保田氏のの上越線工事にも、新鋭の工事設備を大袈裟にやる事が出来たのであらう。

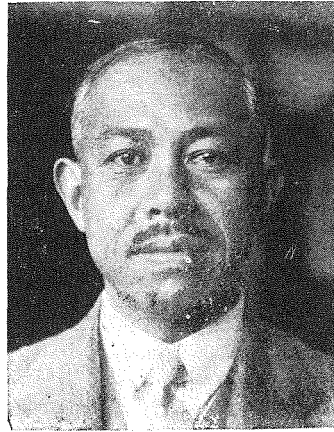
○

建設事務所長時代の久保田氏は、常に鐵道の制服を着けて現場に出た。氏は現場工事に非常に熱心で大いなる興味を持つてゐた様である。現場では工夫に至るまで隔意なく工事談を交はすのが常だつた。然し責任を明かにして、命令を徹底せしむる點では極めて俊嚴だつた。

また、氏は工事狀況を毎日寫眞に撮らせく豫定通り工事が進捗するか否かを確めた。これは文字や言葉の報告よりも、事實に信據すると云ふことを本領とした故だらう。

○

久保田氏の局長時代には、その卓上に常に一片の書類も見られなかつた。これは一面に於ける氏の性格を現したもので、氏は如何なる用件でも速く決めるのだ。若し未決の書類があつても、決して卓上に



最近の久保田敬一氏

留めておく様なことはしない。氏に於ては、勉強ぶる事や急がし振りを見せる事は絶對の禁物となつてゐた。

○

久保田氏は當然な事務に當つてゐる時は、大臣が來ても相手にしない人である。關係を友人呼ばはりしながら請願にやつて來る代議士などなてんで相手にしないでスツボかしたを喰はせることも屢々あつた。これなどは實によく氏の面目を物語るものだ。

氏は決して情實などに動かされる人ではない。間違つた事は如何なる事情があつても絶對に通さないと云ふ硬骨の士だ。と思ふと其反面には又頗るユーモアを發揮することもある。その故に人は氏を「凄いい」と云ひまた「茶目」だとも云ふ。

○

氏は有名なクキツク・テンパーである。氏の部下として働いた人で二度や三度怒鳴りつけられない者はないと云つて好い。それは身を以て先んずる氏の勤務振りから見るとさもありうと思はれる。叱られ乍らも部下の人々は云ふ、『働らせることの上手な人だ』と。

○

久保田敬一氏、氏は今や鐵道次官となつて國政の樞要なる地位に就かれた。材の處を得たるものと云ふべきである。江木氏は後事を久保田新次官に托して安心して鐵道省を去つた事だらうし、原新鐵相は久保田氏の存在によつて、躊躇する處なく鐵相の椅子に就き得た事であらう。